

ギンガミ

なぜここにいるのか
わからず、寝おきの子が
ギンガミを爪でめくりあげている

わらってて、まだ幼くて この瞬間のことは
おぼろげにも記憶しないだろう

震える窓枠からの冷気をこらえて
しずかに羽を揃える蚊トンボ

すでにこときれているのか つまむと
粉々にくだけてしまった

固い座席でうとうとする

おぼろげなはじまり

おわりもまたおぼろげだ

どいつも 床ですべる

おびただしく裂けたあのギンガミだ

野ざらしの星々もずっとそうだ

つねにあたらしくかっと燃えて

遠くちらばって小さくて

どれほどくやしがっているのか

枕にしていたフリースに、袖をおおして暖をとる

寝おきの子が

ぼおっとうかぶ駅の名を

あやすように つぶやきながら

微動だにしない黒い夜空を、ざらつく手で

さわろうとした

嬉しいほどおそろしくて

このおそろしさも

だれかが放火したのだ と、かすめる

と

頭上にひしめく膨大な一粒に

立ちつくしていた